

環境、景観形成について、インフラ整備の重要性を指摘する建設コンサルタンツ協会の石井弓夫会長。生活を支える機能面の考え方だけでなく「景観形成を意識したインフラ整備」の必要性を説く。建設コンサルタントの立場から、美しい国づくりに向けた思いを石井会長に聞いた。



建設コンサルタンツ  
協会会長  
石井弓夫氏

## 景観形成を意識したインフラ整備

### 必要性、効果を社会に提示

——普段感じている国づくりに対する思いとは

公共事業やインフラについて、国民がどのように感じているか、その考え方が変化している。美しい環境の中に住みたいという気持ちは国民誰もが思っている。それには道路や河川などのインフラ基盤が整わなければ、環境として成立しない。街や地域に住むための環境とは、インフラがしっかり整備されていることが前提になる。それが美しい国づくりの基盤であろう。そのためにも建設コンサルタントは、長年の経験に基づいた技術や知識、ノウハウを駆使して、適切な解答を示さなければいけない。いいものをつくるということは、逆に投資が必要な側面も出てくる。国民に対して、なぜこういうものをつくるのか、それによってこのような効果が得られると提示し、だからあといくらのお金が必要になるという根拠を明確に説明することが欠かせない。

——国づくりに対する日本の現状をどのように見ているか

日本橋みちと景観を考える懇談会が、東京の日本橋地域の歴史や文化を継承し、景観に配慮した新たな再生の方向性を導こうと、11月にアイデアコンペを開き、建設業界を中心に300点を超える提案が集まった。

私はこれを「大江戸日本橋復活大作戦」と言い換えたい。様々な提案が示され、民間側からの日本橋再生に向けた熱い思いが伝わった。こうした流れは日本橋だけに向けられている訳ではないと思う。日本橋をどうすると

いうよりも、むしろ同様の課題を抱えた街、地域をどうすべきかという問いにつながる。

日本橋を再生するためのアイデアの切り口はさまざまであるが、街の文化や魅力を引き出すために、ほとんどの提案が都市交通をどのように体系付けるかを踏まえている点に、参加者の共通の問題意識が感じられた。

韓国・ソウル市では、市中心部を東西に流れる清溪川（チョンゲチョン）の上に整備された高速道路の老朽化に伴い、道路をつくり直すのではなく、逆に道路を撤去し川を蘇らせる事業を進めている。

あるアジア国際会議に出席した時のこと。清溪川復元事業について、ソウル市長が自ら進めている再生事業を自信を持って発表していた。これこそが美しい国づくりの姿勢だと強く感じた。私自身、技術者としても、こうした大実験の整備に注目している。

——日本の風景で日ごろ気になっていることはありますか

看板や電柱があちらこちらに存在しているが、こうした風景に対してはもう少しすっきりさせるべきだと感じる。仮に電柱がない街を想像してみれば、どれだけ風景が変わるか。われわれ日本人がパリを訪れると、いい街並みと感じる。これは建築物や都市計画だけの問題ではなく、美しい国づくりを意識したインフラ整備を進めているからだ。インフラ整備はたんに生活を支える機能的な側面だけではない。そうした環境としての美しさを考える視点が欠かせない。

（日刊建設通信新聞 2004年12月24日）